

【書評】

女の身体は資本か、負債か。上野千鶴子と鈴木涼美が とうとう邂逅を遂げた往復書簡本の残響

～『往復書簡 限界から始まる』

(上野千鶴子・鈴木涼美 共著、幻冬舎、2021年)

Is a Woman's Body Capital or Liability? Let's Learn It in
the Echo of a Discussion Generated from Letters
Exchanged between Two Unprecedented Japanese
Feminists, Suzumi Suzuki and Chizuko Ueno

河崎 環[†]

男性的価値観に同化する女たち

「いいなあ、私も欲情されたいよ、って思うよ」

その言葉は、私が「#MeToo運動」について意見を聞いた、聡明で、かなり意識的に自ら不美人を標榜する女性から、素面で、ごく軽妙を装って発せられた。性暴力は侮辱であるとか人権尊重すべしとかの世間の論調をちゃぶ台返しするかのような、自らを男性の価値観と視点から見る「欲情」とのストレートな表現。

どういう意味で、こんなことをこの人は口にするのだろうか？ 何度も反芻するうちに、40代半ばの今に至るまで魍魎魍魎の棲家たるマスコミ業界を「つくる側」として泳いできた彼女の、誇りと劣等感と、さまざまに経験してきたのであろう場面のフラッシュバックの複雑に入り組む脳内^が、正確に投影されてくるようだった。

「いいなあ、私も欲情されたいよ」は、「私も欲情されるような女だったなら、もっと人生ラクだったかもね」と言外に意味する痛烈な皮肉でもあり、もしかしたら40代半ばの女の生々しい欲望の片鱗でもあり。その光の強さと影の濃さが意味することに微かな戦慄を覚える一方で、どこか良くも悪くもマスコミ人らしい大衆的センス、「据わりの良さ」も感じる。その据わりを支えるのは「どうせ、世の中なんてそんなものだし」という、約四半世紀の社会人経験をもってしても拭えない、それどころか強化してしまったのかもしれない、諦念だ。

欲情されるような性的魅力のある女は、生きていきやすいだろうか。その魅力を使って仕事もしやすいだろ

[†]立教大学社会学部兼任講師 tami.kawasaki@rikkyo.ac.jp

うか。有り体に言って「トク」だろうか。ネットや週刊誌の情報では、男というものは視覚的に性欲を刺激されるのだ、だからグラビアも AV ももっともって過激に、好みもどんどん細分化してマニアックになるのが自然の摂理、つまり視覚的に男を満足させる能力を持つ女が喜ばれるのは自然の摂理であるとして、それを「需要」と呼ぶ。広告型ビジネスモデルのマスコミはポピュラリティー（『売れる』）を盾にそんな文脈を自己反省なく放置してきたし、おかげでネットでも同じ価値観が再生産され、閉鎖的空間であるがゆえに強化・醜悪化の様相を呈して久しい。

若者がテレビを見なくなったところにスマホとネット動画時代がキックインして、撮られる側の容貌レベルを高く期待するルッキズムは加速した。結果的にみんな画一的な白い顔と頭身バランスのおかしい身体になるデジタル修正は、もはやマナーである。外見優先主義は深刻となり、事実上「映えないモノやヒトは存在自体が希薄となる」時代がやってきた。

そんな場所で仕事をしてきた、いま 40 代以上のマスコミの女たちの中には、既に男性の意思決定によって確立されていた業界の価値観体系に同意書名し、黙ってやり過ごすことで組織を垂直方向に上って生き残る道を選択した「名誉男性」が少なくなかった。「いいなあ、私も欲情されたいよ」は、価値観を「向こう側」へ預けた、完全に名誉男性的な視点であり、同時に彼女の引き裂かれかき回され叩きつけられて「このように生き残ってきた」人生の仕上がりをも見せているようだ。

伊藤詩織さんを批判した女側の「理由」

女の身体は資本か、それとも負債か。「私も欲情されたいよ」と皮肉な羨望を口にした彼女の目に、世間の女の身体は資本と映っているのだろうか。そして「欲情されない自分」の身体は負債なのだろうか。レイプ被害に遭ってしまうほどの「美人すぎる（2010年代の日本の大衆に愛された陳腐表現だ）」ジャーナリストや国際政治学者や、「#MeToo」で過去を週刊誌に告発したような女優の身体は、もしかしてその公然としたカミングアウトごと男の欲情の対象であり、資本だろうか。それとも一生何かを刻みつけられ、その場面に精神と存在を固定され続ける負債なのだろうか。

2017年、ジャーナリストの伊藤詩織さんが元 TBS ワシントン支局長だった山口敬之氏に強姦されたとして警察に届け出たものの、不起訴となった経緯を記者会見で発表したとき、日本社会は決して全面的な支持を表明した者ばかりではなかった。彼女のインタビューや執筆記事が日本版「#MeToo」の旗印となってリベラルメディア各所を飾ると、その内容以上に「美しい彼女の写真」が大きなメディア的価値を持ち、ネット的バズをドライブした。

男性の側の反応は、一旦傍に置く。それは男性の中で反省されるべきことだし、男性論客がこれを積極的に扱わないことを不思議に思うが、きっと沈黙は一種の肯定なのだろう。

政治や経済や社会は論じるのに自分たちの性は好きな造形やジャンルといったような表面でしか語れない語彙力の不足は、アカデミックに致命的だ。犯罪であっても凄惨な事件であっても男性内の批判精神がなぜか作用せず、自分たちの中に微量なりとも同じ可能性を見出してしまう罪悪感をそれと認めたくないためなのか、最終的に「男ってそういうもの」とホモソーシャルな共感と正当化に落ち着こうとする内省の欠如は、もしかして本人たちも抗えずに陥る病理じゃないかと疑っている。

だが翻って、同じ「強姦される側の立場となりうる」女たちの間ですら、共感と反感は半々だった。「彼女の勇気を称えたい」「自分も当事者だ」という女もいたが、ピンポイントに伊藤詩織さん個人に対して「不注意」「売名行為だ」「本当はわかっていたはず」「計算高い」などと批判する女も相当数いた。加害者である山口氏への批判よりも、被害者である伊藤さんへの批判的感情の方がよほど大きかった。これはレイプ被害の告発者へのセカンドレイプであるとして伊藤さんが個々の誹謗中傷に対し法的手段に訴え出るまで、日本という社会は男女問わず「レイプした男」ではなく「レイプされた女」のほうへ明に暗に制裁を加え続けたのである。制裁を加えていた女たちは、伊藤詩織さんの「女の身体」を資本と認識していただろうか、それとも負債と認識していただろうか。

この資本／負債という私の中のぐるぐるとした思索は、『往復書簡 限界から始まる』（上野千鶴子・鈴木涼美 共著、幻冬舎、2021年）の裏帯文に「女の身体は資本か？負債か？」とあったことに端を発する。直感的に、伊藤詩織さんを「売名行為」「計算高い」と批判した女たちの目には、伊藤さんの身体は自分たちの持たない特別な「資本」として映り、本人たちも言語武装して自覚しないように閉じ込めた感情があったのではないかと思っていたからだ。

それは、「これまでの男性社会で生き残ってきたタイプの成功者女性」にとって、「性暴力とは、”外見の良さに甘えた不注意な女”が受けてしまう因果応報」にしておいた方が守られる、なんらかの自尊心のようなものがあつたからではないのか。彼女たちの目に、日本版「#MeToo」は「不注意な甘えた女が自らの反省を傍に置いて声を上げ、男だけを責める運動」のように見えていなかっただろうか。

男女雇用均等と呼ぼうが女性活躍推進と叫ぼうが、あらかじめ男性が作り上げた社会構造に「あとからお邪魔させていただく」女たちにとっては、そもそもルールが不利で、アウェイもいところだった。それは事実だ。自分が女であることは目に見えるハンデであり、スタートから背負う荷であるとわかっていてゲームに参加するしかなかった。だから隙なく武装し、嫌な思いをしてもそれは自分の注意や覚悟が足りなかったせいと歯を食いしばって現実に目を瞑り、感情を殺してまた武装を厚くすることでやり過ごしてきた彼女たち（男性社会サイバーたちは、「#MeToo」を拍手して受け入れるわけにはいかなかったのだ。

私は、自分の周りのいわゆる「仕事のできる」高学歴女性たちが「#MeToo」に対して奥歯にものが挟まったような言い方をするのを、不思議な思いで見ている。彼女らの見る世界では、女という存在の周辺、自分たち

の性の周辺に常に「それは損か得か」という、なぜか他方の性である男性側からの視線がブリンストールされていたからだ。彼女たちは、自分が女であることで損をした、あるいは得をした、という、対極に存在を仮定する男との比較の部分でしか、自分の「女」を自己評価できていない気がした。視界に、というより、もはや眼球に色眼鏡が嵌め込まれているようだった。それは、彼女たち世代の「女である」体験、ひいては性体験の多くに損得がずっと関わっている、まわりついているからではないかと思えた。「いい男」あるいは「だめ男」を捕まえることで「キャリア」が有利不利になる、結婚や妊娠出産するか否かで「年収」が変わるといったような、経済で数値化できる「人生の損得」の価値観だ。

男性の定石を内面化した、都合のいい女性たち

「女の性の価値」は、女の側から自主的に決められるものではない。その値つけをするのは、それになんらかの対価を払ってでも欲しがる者の側だからだ。そして生物学的なものなのかそれとも社会的なものなのだろうか、人類最古の女性の職業とは売春婦であるという悪辣な「それっぽく聞こえる大嘘」とともに、どうも伝統的に女には、可視的であれ不可視であれ、それぞれの時代や文化の価値観で値札がついてきたようなのだ。

なぜ、性をめぐる男女は(男女に限らずとも)そこに支配／非支配や勝ち負けや損得を語らずにはいられないのだろうか。そしてそれらを合理化するものとして、対価報酬による解決を生んだのだろうか。その最も遠慮なく直截的に表現される場が「夜のお仕事」業界、性産業である。上野千鶴子は、本書『往復書簡 限界から始まる』で『『夜のおしごと』の対価には、スティグマ代が入っています』(p.24『1 エロス資本』)として「性の市場のジェンダー非対称性」(p.28 同)を指摘する。「おそらく男たちはやましい思いがあるから、スティグマ代込みで高い対価をセックスサービスに払っているのでしょう。」(p.25 同)

だが、上野はそんな男性側の「対価を払ったんだから自分の罪悪感を合理化できた」という安堵を一蹴する。

「セックスワークは女性にとっては経済行為です。対価が発生しなければ、けっして彼女たちはセックスワークをやったりしないでしょう。ここに謎はありません。他方、顧客の男たちは対価を支払う消費者です。彼らは一体何を买っていることになるのか？ それがかねを対価に得てはならないものであることを、男たちは密かに知っているからこそ、そのやましさを、相手の女性に転嫁するのではないのでしょうか。その際の最も強力なエクスキューズが『自己決定』です。」(p.26 同)

なるほど、対価の発生する性産業ですらない、合意の存在しない性暴力のケースでも、その責任転嫁のエクスキューズはほぼ全ての場面において、もはやつきものだ。

『『この程度のことにぎゃあぎゃあ騒ぎやがって』『たいそうなことじゃないだろ』『減るもんじゃなし』……書き

連ねているうちに、これらのせりふが、セクハラ男や痴漢男性のせりふそのものだとわかります。そこに『自己決定』が加われば、『おまえものぞんだくせに』『やってほしかったんだろ』『まんざらでもない顔して』がつきます。(男にとって不利な)女性の経験を過小評価し、自己を免責するのは男性の定石、それを内面化する女性がいるのは、彼らにとって好つごうです。」(p.57『2 母と娘』)

「ついてきたってことはそういうつもりだろう」「そんな格好をしているからだ」「お前が誘ってきたんだ」「思わせぶりな素振りをするからだ」「隙があるからだ」。だが、これらの言葉はまさに上野のいう「男性の定石を内面化した、都合のいい女性たち」から伊藤詩織さんに向かって投げつけられた言葉と同一であった。「先が予測できていたよね?」「わかっていてやったことでしょ」。自民党の杉田水脈議員は「女として落ち度があった」と発言するなど、伊藤さん批判の急先鋒となった。同じ性である女性が、一体どんな悲しいことや酷い言葉を経験して「内面化」とやらをすれば、こんな言葉をレイプ被害者に向けて投げつけることができるようになってしまうのだろうか。

上野によれば、「(AV 監督)二村(ヒトシ)監督はポルノは『(女性の)侮辱の商品化』であるとはっきり言ったそう(p.56『2 母と娘』)。なるほど、女の侮辱の商品化が大手を振るい、その価値観が男女問わず染み込んだ社会では、女を侮辱することには男も女も反省がない。男性社会に対する反感を抱きながら社会を泳いできたはずのアラフォー以上の「できる」女性たちが、既に男性的価値観を内面化した都合のいい女たち、すなわち上野の指摘する『「ミソジニー(女性嫌悪)」の『エリート女』』(p.30『1 エロス資本』)となって立派に仕上がってしまっていることに、本人たちはどれだけ自覚的だろうか。

「エロス資本」という資本は存在しない

この『往復書簡 限界から始まる』において、上野千鶴子と鈴木涼美の書簡テーマ第 1 回「エロス資本」は、上野によって設定された。

「初回に『エロス資本』をテーマにしようと持ちかけたのは、わたしでした。あなたが『エロス資本』をもとに仕事をしていたと知ったからです。」(p.22『1 エロス資本』)

だが、上野本人はその概念の存在そのものをこう指摘する。

「正直にいうと、わたしは『エロス資本』と言う概念に批判的です。『エロス資本 erotic capital』は社会学者のキャサリン・ハキムの概念だそうですが、『文化資本』や『社会関係資本』にならってつくられたこの概念は、社会学的にはまちがいだとすら思います。というのは、『資本』とはほんらい利益を生むものですが、経済資本にかぎらず文化資本(学歴や資格)や社会関係資本(コネ)のような目に見えない『資本』であっても、獲得し蓄積することが可能であるのに対して、『エロス資本』は努力によって獲得することもできず(努力によって獲得で

きるというひともいますが、それには限界があります)、蓄積することもできないばかりか、年齢とともに目減りしていくだけのものだからです。しかもその価値は、一方的に評価されるだけで、評価基準はもっぱら評価者の手の内にあります。つまり資本の所有者がその資本のコントロールができないという状況のもとにある財を、『資本』と呼ぶことは端的にまちがっています。(中略)この概念が示すのは『若くてキレイな女性はトク』という通俗的な世間知を、アカデミックに粉飾しただけのものでしょう。』(p.22-23 同)

そんなふうにして始まる対話に(上野によれば)元 AV 女優の「スティグマ」を負う鈴木涼美が全力で応じているのが、この本の前提としてもものすごいことなのだ。上野に対する敬意を満腔に湛えた鈴木は、母娘関係や男性観、母を病死で喪失した体験など、自らを紐解きながら「性の二重基準を設定する男の女性差別的な思想にかつて加担した身体を抱えて生き」(p.254『10 フェミニズム』)る自分が「多くの男性に対して、どこか侮蔑的な気持ちを持って(中略)、男の根底にある欲望が変わらないことを絶望視して」(p.310『12 男』)きた理由を掘り下げていく。

こんな恐ろしい書籍をよくも作ったものだ、と、編集者と両著者へ最上級の賛辞を贈りたい。知らぬものはいない、日本のフェミニズムの代名詞であり東大名誉教授の上野千鶴子と、特に男性媒体において特殊な角度で興味を持たれてきた元 AV 女優・元日経新聞記者・作家でありフリーライターの鈴木涼美が、女性学の中でも「気づかないふりをして名言を避けられる」か「ガツガツ過剰適応して攻撃的に語られる」かの両極端に扱われる女の性や、性にまつわる承認欲求を往復書簡の形でそれぞれに語り、時に寄り添い、時に交わり、時にぶつかり、互いに全くアプローチの違う「性的な自己」を語っていく。共に頭でっかちすぎない在野性を持ちながら、天才とも言える分析力と観察眼は、ある意味で現状のフェミニズムにおける宝物のような知性同士。30 以上の年齢差を持つ彼女たちが、たまたまこの時間に同時に存在してくれたことに感謝したいと思えるのだ。

二人の対話からわかったことは、エロス資本という資本など存在しない、あるのは「女の性に値つけをしてきた男という存在」と「その価値観体系の中で生存にもがいてきた女という存在」だけだ、ということである。

評価される性から生産する性へ

「女の身体」に乱暴に強烈に振り回された人を、私はもう一人知っている。とある”元・女子アナ”だ。10 代の頃から摂食障害に苦しみ、テレビ局への就職とともにそれは加速し、30 代で出産するまで続いたという。外見への執着に自覚があり、自分を客観視する聡明な彼女に、私は「どうしてあの 90 年代当時の女子アナなんていう、人格以前に外見で評価されて序列をつけられる、悪質なミスコンみたいな世界に自ら入っていったんですか」と、無遠慮に聞いた。すると彼女はノースリーブのブラウスからスラリと伸びる、いまだに細い細い折れそうな腕を組んで「他人に評価されることでしか自分の価値を確認できなかったからよ」と答えた。「摂食障害ってそういうことよ」。当時の彼女にとって、女の身体は資本だったろうか、負債だったろうか。

さて、私自身は”元・女子アナ”の彼女が「出産を機に摂食障害がおさまった」と言ったことに、なるほど、と感じた。子育てに必死でそれどころじゃなかった、とか年齢的なもの、という掘り下げない言い方もアリだろう。だが彼女の中で、自分が母になったことで、他者から評価されること、複数の間で比較され価値を算定され付与されることに意味も興味もなくなったのではないか。生殖の出口で、出産という自身の再生産(リプロダクション)を遂げるときに、女の身体は「男からの鑑賞や欲情や価値付与の対象・客体」ではなく、文字通りの「生産の主体」となるのである。

よく、妊娠した女に向かって「誰の子？」との奇妙な言葉が投げかけられるが、その答えは第一に厳然と「アタシ(出産者)の子」であるべきなのだ。自然科学的な「人類の生産」という軸で考えた途端、女の身体は損得を超越する。しかも自分とは性の異なる男子を自分の身体から産み出すことだってある。だが同じ現象を近現代の社会科学や人文学的に「女の妊娠出産」と捉えると、途端に「女が存在や人生における損得」の意味を帯び始めるのはなぜだろう。

評価される性から、生産する性へ。現代の過激とされるフェミニズム論者の多くが選択的に「母」未満であったり、母娘関係の苦悩や男性とのトラウマを纏い続けていることには、もしかして評価される性から脱出しないことと何か関係があるのかもしれない。上野と鈴木の話の残響の中に、そんな音を拾った気がしたのは、私の空耳だったか。